



美術品などを最高の形に仕上げる キーワードは「装う」

明治43年(1910年)青垣町佐治地区で創業した表具店の「太田檜雲堂」。研究を重ねた技で巻物・掛け軸・屏風・ふすまの仕上げや、染み抜きなどの修理を行います。

伝統の技に新しい技術を取り入れる4代目の太田嘉久さんに仕事に対する思いなどを伺いました。

絵画や書の仕立てを行う

表具店は、お客様から絵画や書を預かって、絵の具や墨によって縮んだ部分をきれいに伸ばし、掛け軸やふすま・屏風などに貼り付けて仕上げることを生業にしています。また、当店では筆ペンやボールペンの落書きを消したり、染み抜きなど修理も行っています。

1から物を作り上げるのではなく、組み合わせで最高の形になるよう仕上げるのが表具師の仕事です。

長く愛される作品を

私は高校を卒業してから職人になり、今年で33年目になります。道具や基本的な作業方法は創業時から変わっていませんが、新しい道具を使って作業を効率化したり、新しい薬品を使って染み抜きをしたりして、少しずつ作業を改良しています。

一度仕上げた作品は20〜30年はもちますが、父や祖父の作品を私が修理することもあり、作業の仕方が異なる部分が見て取れて面白いです。また、自分が過去に手がけた作品が、長い年月を経て修理に持ち込まれることもあり、自分の作品が長い期間残ることを考えると、今回もきちんと仕上げようと気が引き締まります。

お客様からのお礼に救われた

若い頃はバブルの時代だったので、都会で働いている同級生たちから取り残されているような気持ちになることもありました。しかし、その時熱意を込めて取り組んだ作品に対して、お客様からお礼を言っていたことを覚えています。お客様に喜んでいただき、納得して預けていただけるよう、特殊な作業は動画で説明するなど、より一層の工夫をするようになりました。

表具の仕事をもっとの人に伝えたい

現在は、昔に比べ日本家屋が減ったことで表具の需要が減り、職人も高齢化していますが、表具店の仕事をもっと知ってほしいと考えています。そのため、丹波市の身近な偉人の書画を紹介する「丹波偉人伝」という展示会や、イベントなどで屏風やミニ掛け軸づくりなどのワークショップを実施しました。

まず「表具」を楽しんでもらい、古い物でも修理をすれば使えることなど、価値があるということに気づいてもらえたら嬉しく思います。自分たちの仕事を多くの人に伝え、表具店として、世の中の役に立てればと思っています。